

踏み跡 <My Mountains>

北アルプス	飛騨から木曾へ(笠・抜戸から木曾御岳へ)	No.157
-------	----------------------	--------

昭和45年9月6日(曇りのち晴) 東京→高山→新穂高温泉→わさび平

夏の真っ盛りを仕事に取られてしまったので、夏休みの山旅は9月になってしまった。

徹夜明けにもかかわらず3時に起床、国立発4時29分の一番電車で東京駅へ。

一度は新幹線で山へ行ってみたいものだと思っていたが、遂にそれが実現した。ひかり一号4号車02C席。登山姿の乗客は見当たらない。曇っていて車窓の眺めにさしたる楽しみもない。新横浜を過ぎたあたりから眠ってしまい、目が覚めたらもう静岡を過ぎていた。名古屋8時、プラットホームは超満員で降りるのにも一苦労の状態。「新幹線で万博を見に行こう!!」という観光用のキャッチフレーズが人を呼び、この混雑。「人類の進歩と調和か?」と独り言。

6番線に回り8時25分のしろがね、2号車12A席。新幹線の次は座席指定、こういう優雅な登山もたまには悪くないが、山旅は始まってしまえば優雅さなど必要としない。この際文明の利器に頼っている間だけでも優雅さを装ってみることにした。発車前の静かさの中でアイスコーヒーを飲みながら新聞。

ディーゼルカーは特有の轟音を立てて発車。前回は夜行列車だったので沿線の風景を見るのは今回が初めてだ。岐阜で逆編成になり、濃尾平野を駆け抜けて美濃太田を過ぎてしばらくすると段々に山あいに入っていく。車掌が車内放送を利用して車窓の案内をしてくれるのも面白い。

高山11時45分着。バスを待つ3時間半の時間を利用して高山の町を散歩し、「しら川」という店で昼食(飛騨定食という山菜定食)

バスは13時15分発、ここでも登山客の姿は全く見られない。時々喋る車掌のガイドに耳を傾けながら2時間半揺られて新穂高温泉に到着。

ここで文明の恩恵ともおさらばしなければならない。ここからは二本の足だけが頼りの旅が始まる。

バスから降りた客は皆ロープウェイ駅へと吸い込まれていった。

我が山旅は、15時50分蒲田川左俣林道への第一歩で始まった。もう山は雲に姿を隠し、夕暮れが近いことを知らせている。

今宵の宿の予定地であるわさび平まで一時間のアルバイト。

わさび平の小屋はちょうど小屋じまいをしているところだった。裏手の河原に第一日目の幕営。

「この頃毎日熊が出ているから気をつけなよ」という小屋のおじいさんの忠告が気に入り、闇に耳をそばだてながら夕食。夕食のメニューは餅入りラーメン(コンビーフ、ナス、ジャガイモ入り)。

かくして一週間の山旅の初日は終わった。思えば、朝6時の時代の先端を行く新幹線に始まり、夜のとぼりの下り始めるわさび平のツェルトに終わる変化に富んだ一日だった。

19時15分就寝。時々小雨がパラつき始めたが、気にしない。



昭和45年9月7日(曇りのち晴) わさび平→大ノマ乗越→抜戸岳→笠ヶ岳山荘

5時起床、6時15分出発。今日は西俣を遡り2800mまで登らなければならない。

秩父谷の冷たい水をそっと口に含み喝を入れる。6時前には多少の雲を残していた空も、8時を過ぎる頃には快晴になり、真夏と変らぬ暑さとブヨの大群。乙女の優しき声のような爽やかさのハクサンフウロが一時の暑さを忘れさせてくれる。

踏み跡 <My Mountains>

水音も遠ざかり高度を上げるにつれて槍から穂高への稜線は言わずもがな、焼岳の一筋の煙から乗鞍岳までが視界に入ようになってくる。登りながら時々振り返って見る眺めは全く飽きること知らない。

大ノマ乗越は9時40分。第一回目の昼食として一時間の休憩。下界からの長い登りの第一関門を終えた安心感と、輝く太陽とが随分の大休止をさせてくれる。弓折岳をピストンした後出発。

秩父平付近まで来ると、今度は進行方向の右手にまたは右後ろにももうひとつの眺めが現れる。黒部五郎、薬師へと続く稜線をスケッチしながらキジを打つという風流も、ここでなければ味わえない贅沢。

蒲田川の谷間はいつの間にかガスに覆われて、槍穂高へと連なる稜線は視界から消え、足もとのハイマツばかりが目につくようになってきた。そしてそれから一時して抜戸岳に近づく頃になると、そのハイマツの上に鎮座するように笠ヶ岳が姿を現してくる。人が一人抜けられる程度の隙間で二枚の戸板を立てたような感じの抜戸岩。

抜戸岳まで来るともう笠はピラミッドのような三角錐を間近に見せてくれる。(写真：抜戸岳からの笠ヶ岳)やはり北アルプスでは一番の眺めという人がいても不思議ではない。

抜戸から静かに下り、また静かに登る。大笠と小笠の真ん中に立つ笠ヶ岳山荘、15時20分到着。

幕営指定地はあるが、もう残雪がないため水場がない。そんな訳で今日はこの山荘に泊まることに。

(右スケッチ：笠ヶ岳山荘から槍を望む)

沈む直前の太陽が最後の力をふりしぼって今日一日の幸を唄う。その光を受けて真っ赤に染まる槍から西穂への稜線、双六、薬師、黒部五郎、三俣蓮華、白山……すべての山がこの唄を枕に夜の眠りに入る荘厳な静寂のひとつとき。

夕食の後は小屋のオヤジさんの招きで、管理人室のこたつで談笑。これもシーズンオフの山小屋ならではの楽しいひと時である。話が弾み、20時40分就寝



昭和45年9月8日(快晴) 笠ヶ岳山荘→笠ヶ岳→槍見温泉→平湯温泉

起床5時。赤い空、モルゲンロートとはこういう景色を言うのだろうか。もう少しで姿を見せるはずの太陽を寝床で待つうちに眠ってしまい5時50分。もう太陽はモルゲンロートどころではなくなってしまった。槍・穂高は逆光になるため黒く神々しくシルエットを見せている。

小屋代850円を払って、7時山頂をさして出発。9月の朝の空気にはほどことなく秋の香りがある。その香気が体の隅々に沁み渡る頃になると、筋肉や関節が熱気を帯びて胸のポンプもフル稼働に入る。

笠ヶ岳頂上へは10分後に到着。笠ヶ岳は北アルプスのどこからでも見える三角錐の山、つまりここから見える山々の数は数えきれない。乗鞍の山々はさすがに近だけあって雄大な広がりだ。数日後に目指す予定の木曾御岳もやはり雲の上。遠く加賀の白山も雲の上に肩まで姿を見せ、まさに大歓迎を受けている気分である。30分の休憩をスケッチにあてて、7時40分出発。

クリヤ谷下降点までの大下りの後、尾根から離れて谷に入る。笠ヶ岳は背後に大きくそしてやがて自分が歩いている土とひとつながりの何でもない山になってしまう。その代りに焼岳が迫るように近づいてくる。ひとつの景色が背後に去ると新しい景色が目前に迫ってくる。このスリルは山ならではのものだ。

下降点からさらに20分ほど下った所に水場を見つけた。渴きに渴いたのどを丁寧に潤して顔を洗うと、生き返ったように爽やかさが蘇ってくる。

ふと顔をあげると、木々の間に錫杖岳の岩壁が……。不動の構えとはこんなものを言うのかと独り言を言いながら眺め入るその山容は、とにもかくにも圧感。正式な登山ルートを持たないと言われる岩峰らしく、ドンと構えて冷たく固く、動かぬ顔色をしている。

しばらく錫杖岳に見とれながらのんびりと歩き、槍見温泉に正午に到着。一足先に到着していたパーティと

踏み跡 <My Mountains>

ビールで乾杯。

これで今回の登山のテーマ（タイトル）である「飛騨から木曾へ」の内、飛騨の部は終わった。明日は木曾への移動日で、明後日から木曾の旅になる。

今宵の宿は優雅に平湯温泉と洒落こむことにする。大和館という宿に落ち着き、平湯の散歩とスケッチに温泉と旨い食事。

昭和45年9月9日（快晴） 平湯温泉→高山→飛騨小坂→濁河温泉

6時40分起床。こんなに早く起きる必要もないのだが、5時起床の習慣がついてしまったようだ。

今日は飛騨小坂（ひだおさか）を経て濁河（にごりご）温泉へ入る移動日である。

8時40分のバスで高山へ。列車待ちの時間を利用して後半戦に向けて食料の補充。パン、ジャム、缶詰、ラーメン……。

急行のりくら三号で30分余、飛騨小坂に到着。益田川の岸边にある材木の町。集木場の裏手でアイスクリームを食べながらバス待ちの時間つぶし。

12時40分発の濁河温泉行の乗客は5人。小さな町を離れるとすぐに山の中に入ってしまい、何とまあよくこんなところに道を付けたなあと感心するような断崖が続く凸凹道。いつの間にか居眠りをしてしまい、右まぶたに大きなタンコブができてしまった。

濁河温泉は海拔1820m、都会のイメージから遥かに離れた飛騨小坂、そこからさらに一時間半も山の中に入ったところ。山の精気ばかりが力強い所である。

朝日荘という宿に腰を下ろすことにする。「窓から御岳が見える部屋を」と頼み2階に部屋を取ったが、なるほど素晴らしい。

まずは窓からスケッチをした後、里宮、仙人の滝、緋の滝……温泉の周囲を散策。（右：宿の二階から継子岳と摩利子天）

宿の女中は高根村から手伝いに来ていると言う。まだ一度も御岳さんに登ったことがないと笑っていた。明日山へ登るなら……と内緒で（と言っていた）ミョウガを一皿持ってきてくれた。

夕食は岩魚の唐揚げを中心に、まずまずここならではの出し物だ

った。濁河温泉の湯はタオルに薄く色が付くような強い鉄分の湯で、体の芯から温まる湯だ。初秋の山で冷えた体には最適の温もりと言える。



昭和45年9月10日（曇りのち雨）濁河温泉→木曾御岳（飛騨口頂上）→五ノ池小屋（雨のため停滞）

起床6時、朝食6時半。出発7時05分。天気は曇り、昨晚期待に胸を膨らませた木曾御岳へ無事辿り着ける天気だろうか。

昨日一日を列車とバスの旅に費やし充分休養できたため、体は軽く好調。

温泉からしばらく沢沿いに進み、やがて梯子がかかったところを抜けるあたりから高度を稼ぐようになってくる。高度を稼ぎ始めるとともに空模様も段々意地悪くなって、晴れ間が消えてガスにまかれてやがて霧雨になってきた。やがて飛騨口頂上が見上げられる頃になると風までが加わり、文句のつけようのない悪天候になってしまった。

飛騨口頂上の五ノ池に着く頃には、辛うじてポンチョに助けられている上半身以外は完全に濡れてしまった。昨日日本海にあった前線が南下したのが悪天候の原因だとすれば、まず今日一日待てば好転するだろうとの読みから、本日は焦ることなく五ノ池の小屋に泊って天気待ちと決定。

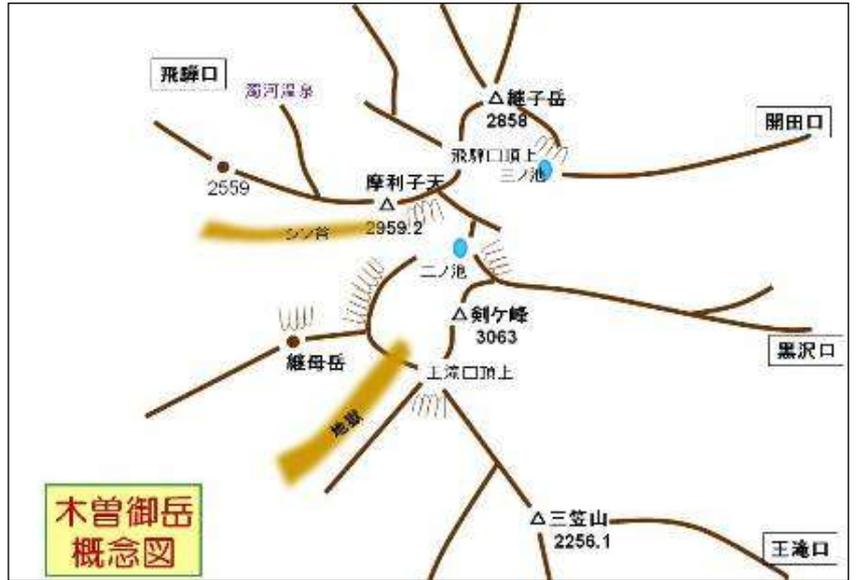
濁河から登って来た者は私の他に8名、うち5名は信仰登山が目的で高度3000mの山にはいささか不十分な身構えに見える。山小屋で雨に閉じ込められた時に必ず見られる光景がここでも見られる。

家に帰る日（予定）を考えるあまり焦る人、是が非でも頂上に立たねばといきり立つ人、いろいろ様々。

やがてしびれを切らせた8人は雨の中を頂上へ向かって行った。そして二時間後、頂上到達の夢ならずして全員ずぶ濡れ、顔面蒼白で戻ってきた。一時して、皆胆を潰して不安におののき逃げるように濁河温泉へと下って行った。

踏み跡 <My Mountains>

結局昼過ぎになって山小屋に残った生き物は、日程にたっぷり余裕がある私と小屋番の29歳の青年との二人だけになってしまった。小屋番のこたつに入って長い雨の雑談となった。19歳の時に雪の六甲山を歩いたのが始まりで、それから病みつきになって10年と言う彼の右足は膝上から義足、左手は指二本欠損という有様。そして今を去ること四年前、「すべての欲から決別して第二の人生を送ろう」と決意して木曾御岳の山頂に入ったそうだ。いくつかの山の話、どこかの雪の話、谷の話と話が弾むうちに退屈なはずの雨の停滞日も夕食の時間になった。



夕食は濁河温泉の宿で作ってもらったニギリメシ二つとサッポロラーメン。デザートにオレンジジュースと洒落こんでみた。(勿論インスタントジュース) 通常の停滞日は昼食は食べないことが多い。昼食を食べるとしてもビスケット・チョコレート・飴玉・水という具合に、決して腹が膨れるようなものではない。停滞日の後には往々にしてスケジュールの変更が発生するからである。

20時、雨が上がり風が強ク吹き始めて、明日の天気への期待がいくらか出来る状態になり、安心して床に就いた。停滞のおかげで濡れたものは殆ど乾いたが、運動不足でなかなか寝付けないのは困った。

昭和45年9月11日(晴) 五ノ池小屋→木曾御岳の峰と池巡り→剣ヶ峰→黒沢

起床5時50分、一日停滞したおかげで素晴らしい青空に巡り合うことができた。

遠く加賀の白山が雲の上に鎮座し、見える山の名は並べ立てたらきりが無い。

7時出発、今日の予定は「木曾御岳の中のいくつかの峰々と池を巡って木曾側に下る」ということにした。

まず飛騨口頂上から北上して継母岳へは15分程度のアルバイト。さすがに御岳の北端を担う峰ならではの眺めが楽しめる。特に雲の連なりの向こう岸にドーンと構えた乗鞍岳の大きさが圧感である。(右の写真)



いかにも陸続きであるかのような雲海は、尾岱沼から見る国後島を思わせる。三角形のトンガリが目立つ笠ヶ岳……。

この素晴らしい眺望が得られる頂が何故に継母岳などという気の毒な名前なのだろう。

水の冷たさが印象的な四ノ池、碧色の水面に岩峰を映す三ノ池と池を巡り小屋に戻った。

上がってくる太陽の強い日差しの誘惑に負けて半時ほど日向ぼっこに費やすことになってしまった。

昨日一日を共にした小屋番氏と雑談のあと一緒に摩利子天を往復しようということになり9時に小屋を出発。



義足にもかかわらず足が速い彼の健脚ぶりには脱帽。

摩利子天から戻った後は二ノ池、剣ヶ峰とまわり、剣ヶ峰から継母岳の往復。(左写真：木曾御岳剣ヶ峰)

継母岳の頂上は20~30mの岩からなり、柔和な曲線を主とした御岳の中であって珍しく男性的な峰である。

ガスが身の回りを包み始めてカメラもスケッチブックも役に立たず、早々に引き揚げる。

12時40分剣ヶ峰に帰着。黒沢口へ下山することにしたが、

どこまで下れば今日の宿にありつけるのかはわからない。とにかく

長く長い下りを下ってみる。

踏 み 跡 <My Mountains>

八合目でロボット（雨量計）の修理に来ている人達と立ち話。中に黒沢で旅館をやっている人がいてトランシーバーで連絡をとって宿を押さえてくれた。おまけに、仕事が終わるまで待っていてくれれば六号目から車に乗せてくれると言う。ありがたき幸せ！！ということで、バッテリー用に用意したと言う蒸留水を沸かしたお茶をご馳走になり、皆さんが作業をしている横で休憩。

八合目を 14 時 15 分に出発。途中湯川温泉経由の道を通り色々案内していただきながら下り、六合目からトラック。

千本松 15 時 30 分、ビールに漬物と月見そばで小休止。16 時の定時交信のあとライトバンに乗り換えて黒沢に 17 時 10 分到着。

昭和 4 5 年 9 月 1 2 日（小雨のち曇りのち晴） 黒沢→木曾福島→塩尻→八王子

夜から凄いい雨が降り始めた。7 時半起床。晴れていれば田ノ原へスケッチにでもと思っていたが、雨なのであきらめて、今日東京へ帰ることにした。

やがて雨は上がったが晴れ間までは出てこない。9 時に宿を出発し、若宮、里宮、黒沢口一合目、王滝口など散歩しまくっているうちに 11 時ごろから晴れてきた。

12 時 15 分のバスで出発。木曾福島駅 12 時 50 分。

15 時 11 分の急行に乗ることにして食事と散歩と SL 見物。SL の給水、給炭、ターンテーブルでの方向転換など一斉に始まるころだったが発車時刻が迫っており撮影はできなかった。

塩尻でアルプス 8 号に乗り換えて、飛騨から木曾への一週間の山旅は終幕となった。

以上